

体育・スポーツ関連学部の大学生を主対象とした意識調査からみる SOGI とセクシャルマイノリティに関する一考察

○藤田依久子¹⁾, #前川真姫²⁾, 高城佳那³⁾, #澤井朱美⁴⁾

(¹⁾環太平洋大学次世代教育学部、²⁾環太平洋大学体育学部、

³⁾静岡産業大学経営学部、⁴⁾日本女子体育大学基礎体力研究所)

研究の目的

学校教育における『性の多様性』への理解と配慮は、2010年に文部科学省が性同一性障害の児童生徒への配慮要請から本格化し、その後、セクシャルマイノリティ全般に拡大され、現在、全てのセクシャルマイノリティの児童生徒が自分たちの性の多様性について学ぶことの重要性が示されている。その一方で、2017年改訂の学習指導要領内には『性の多様性』は明記されていない。また、スポーツに目を向けると、体と心の性が一致しない場合には、厳しい参加条件が定められていたり、カミングアウトを行うと批判や誹謗中傷を受けたりするなど、ルール以外にも様々な障害がある。この様な現状を打破すべく、スポーツ環境の整備やスポーツにおける性の在り方に関する取り組みが進められている。

幼児教育や初等・中等教育、スポーツに関わる教育者や指導者を輩出する大学教育においても『性の多様性』に関する教育プログラムの拡充が課題と言える。そこで、本研究では、スポーツに関わる者を対象に、SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity: 性的指向と性自認) とセクシャルマイノリティに関する認知・理解度等の意識調査により現状を把握し、「性の多様性」に関する教育の在り方について検討する。

方法

調査対象：X地域Y大学学生の男女283名(有効回答数280名、年齢 19.5 ± 0.8 歳)を対象に、競技情報やSOGI、セクシャルマイノリティに関する独自の質問紙を作成し、回答された。本研究では回答された競技レベルを基に、「日本代表レベル」、「全国大会レベル」と回答した者はHigh群、「地方大会レベル(例：中四国大会)」、「都道府県大会レベル(例：岡山県大会)」、「市区町村大会レベル」、「出場していない」、「上記以外」をLow群に分類し、各項目を比較検討した。解析にはクロ

ス集計を使用し、2択の質問においてはカイ2乗検定を実施した。有意水準は5%とし、調整済み残差は $>|1.96|$ で有意とした。

結果

High群に139名(19.5 ± 0.8 歳)、Low群141名(19.5 ± 0.7 歳)を解析した。「あなたは、LGBT(セクシャルマイノリティ)について、どのくらい知っていますか？」において「聞いたことはあるが具体的には知らない」はLow群で有意に多かった(調整済み残差 $=2.1$, $p=0.049$)。「あなたは、SOGIについて、どのくらい知っていますか？」において「深い関心があり、ある程度は説明できる」を回答したものはHigh群、Low群いずれも0名であった。「聞いたことない」はHigh群で有意に少なかった(調整済み残差 $= -2.0$, $p=0.033$)。

考察

本研究の調査結果によると、過去の教育課程で性の多様性に関する教育を受けた経験はあるものの、正しい知識や実体験に基づく理解に乏しいことがわかった。近年、多様性を尊重する共生社会の実現に向けた教育プログラムの充実が取り上げられているが、未だ発表者らの所属する高等教育機関に在籍する学生には十分に浸透されていない。今後の課題としては、教育機関の生徒及び教職員それぞれの立場でSOGIに関する情報の受発信の工夫を図り、教育プログラムとネットワークを構築していく必要があると考える。人々の多種多様な要素を包み込むインクルーシブデザインの観点を基に、「性の多様性」教育を目指し、教育プログラムの充実と寛容力と共感力のある人材の育成を目指すこととする。

謝辞

本研究は、環太平洋大学スポーツ科学センター女性アスリート支援プロジェクトの一環として実施した。本研究に協力いただいたY大学の学生の皆様に感謝いたします。